

まだまだ公務員指向が強い沖縄。

自らビジネスをつくるプレイヤーになろう！

内閣府 沖縄総合事務局 前経済産業部長 仁賀建夫さん

沖縄総合事務局の経済産業部長として約2年の任期をこのほど終えた仁賀部長。新たな沖縄型産業振興プログラムの概要や、これまでを振り返り、住んでみて感じた沖縄経済の展望とその可能性、そして、これから沖縄でビジネスを始める人たちのアドバイスなどを語っていただきました。



仁賀 建夫(にが たけお)さん
1959年、大阪市出身。1982年、早稲田大学理工学部建築学科卒業後、通商産業省入省。95年、中小企業庁長官官房総務課課長補佐。翌96年、日本貿易振興会(JETRO) リオデジャネイロ事務所長。99年、通商産業省 東北通商産業局 産業部長。2002年、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)化学物質管理技術開発室長。03年、同機構バイオテクノロジー・医療技術開発部長。04年、同機構 企画調整部統括主幹。05年から内閣府 沖縄総合事務局 経済産業部長に就任。07年7月にその任を終え、次の地へ向かう

「2002年度から取り組まれていた『沖縄型産業振興プロジェクト』について、説明ください。」

経済産業省が地域振興のために進めている事業で、「産業クラスター計画」と言っています。クラスターというのは「ぶどうの房」という意味があり、房のように集まることによってその地域の産業が成長していくという計画です。

全国各地で大学などを中心に地域の産業の集積を図り、地域の企業のネットワーク、企業間の連携を高めることによって、各地

INTERVIEW

域が経済的に成長するという狙いを狙っています。

2002年度からの5年間で、我々のこのプロジェクトに協力していただいた企業は300社になりました。琉球大学をはじめとする各大学、研究所、公社等の支援団体を含め、民間企業など約350名の会員が集まっています。

そのメンバー間で、2002年から4年間はず、産業クラスターを「形成」するための会議や講演会、セミナーなどの事業を進めてきましたが、18年度からは第二次計画にあたる「成長期」として、実際に300社から年間3つぐらいの新しいビジネスのプランを出していただいて、1年間に900個の新しいビジネスを作り、それを応援する活動をしているところです。

「計画の中では分野ごとにくつつかの産業に分かれているということですが。」

産業クラスター計画に関しては、それぞれの地域で得意な分野を中心に事業を進めなくてはならないということがあります。沖縄は4つの重点分野があり、1つは健康関連産業、2つめは情報関連産業、3つめは加工交易型産業、4つめが環境関連産業。この4つがこれから沖縄で成長する可能性が高いと考えられています。

「特に今年度は沖縄型産業振興プロジェクトと別に、中小企業向けに注目されているプログラムがあるとうかがったのですが、そちらについても説明いただけますか。」

昨年来、都市と地方の格差という問題が注目されてきて、地域の発展のためにはどういふことがあるだろうと、中小企業庁や経済産業省を中心に議論されてきました。今までの地域振興の中では工場の再配置、東京や大阪など大都市圏にあった工場を地

方に移転させようという政策があったのですが、これだけでは不十分と考えられました。そこで、地域にある資源を活用して地域の企業が自分でビジネスを起こすものを支援しようという政策が出てきています。それでこの5月に法律が公布され、「地域資源活用プログラム」ができました。この制度に関しては、これから県のほうで基本構想を作っていただいて、その後、同構想に沿った形で企業から事業計画申請を受け、応援するという仕組みです。7月以降、皆さんにPRしていくこととなります。

「地域資源という観点から見ると、沖縄はどうなのでしょう。」

沖縄は地域資源の宝庫です。日本で唯一の亜熱帯地域なので、育つ植物も違いますし、沖縄でしか産まないものというのはたくさんあります。

また、地域資源というのは地産物だけでなく、地域の技術、たとえば紅型の技術のようなものも地域資源です。自然環境や観光資源も地域資源ですから、沖縄の芸能も音楽も、この地に特有のものはすべて地域資源となります。

ハードのみならずソフト的なものも地域資源だということ考えられますから、いろんなアイデアが出るのではないかと、非常に期待しています。

沖縄の人が地域資源として意識していないものが資源になるということもたくさんあると思います。ぜひそれに気づいていただいて、そこでビジネスを起こしていただければ、地域の経済が成長しますし、失業率の改善になるかもしれません。地元資源が活用されるということで自信にもつながると思います。

「仁賀部長が長く、とくに沖縄の産業企業の中で、地域資源として期待できる分野というのは具体的にありますか。」

健康関係の産業はこれから非常に面白いと思います。世の中、物があふれている中で、健康は最大の関心事です。健康・長寿の地域として沖縄は注目されています。たとえば、今、我々の中でテーマとして取り組んでいるものに「琉球エステ・スパ」があります。今の状況では、沖縄にエステ

安座間 美優

表紙グラビアインタビュー
沖縄を語る。

美優

70年代の創刊当時から現在まで、ティーンエイジャーや20代前半の女の子たちのバイブルのファッション誌であり続ける「Poppin」表紙をめくると、長い手足にはじけんばかりの笑顔の女の子が、こんなキヤッチとともにページを飾っていた。「ノンモデル安座間美優の旬のボトム着直し30Days」女の子たちの憧れ、カリスの仲間入り。確実な果たしつあるモデル、安座間美優さんである。

彼女は今年、40周年を迎える日本トランスオーション航空のイメージガールにも選ばれた。白砂浜、青い空の下で、白いドレスに身を包み、その長い手足をのびのびと伸ばす彼女の姿が、いま、コマーシャルでも放映されている。

「モデルの仕事始めたのは高校1年のとき。高校2年から拠点を東京に移して仕事をしています。しばらくは沖縄に帰れなくて、今年の成人式の時、2年ぶりに帰ったんです。那覇の街もすいぶんと急激に変わりましたね。」



安座間美優(あざま みゆう)さん
1986年、広島生まれ。那覇育ち。2002年に「ミス・セブンティーン」に選ばれ、『SEVENTEEN』の専属モデルとして活動開始。2006年、『ノン・モデルグランプリ』になり、現在は『non-no』専属モデル。また、今年40周年を迎えるJTAのイメージガールにも選ばれた。雑誌モデル以外にも、テレビ番組『オモムさん』(テレビ朝日)にレギュラー出演中。ホームページはhttp://www.vertex-pro.com オフィシャルブログ「みゆうみゆう」http://ameblo.jp/mewazama

Miyu Azama

とろろたんたな「ついでに美優さんは現在、仕事と学業を両立する大学3年生。専攻は「キャリアデザイン」。

「将来を設計するための学問主に教育学と経営学が柱になってるみたいで、すでにモデルの仕事をしてたので、就職のための学部選択という考えはなく、もう少し広い視野で将来を考えられる学部だから興味を持って。」

その美優さんに「沖縄に戻つて暮らすという将来は有りですか?」と聞かれました。沖縄に帰りたい。おはあちゃんになってまで、電車に乗る暮らしはちょっと「なごみ」で、バスが速い東京はあんまり長生きできないさそうで笑!

基本はゆつくりのんびり、でも芯の強いイメージ。自分が帰る頃「沖縄の将来に希望をみますか?」この問いに、彼女はひと呼吸おいて言葉を選んで「うん、いい。」

「一般常識を持った方がいい場所であってほしい。海をこなし、あんなに自然が心ないうちで汚れていく姿はやっぱり見たくないですね。」



沖縄オリジナルのスパは、今後大きく伸びる可能性がある

は数多くあっても、ほとんどがバリやハワイ、タイなどの既存の方式のものです。シークワサーや月桃、お茶など沖縄の産品を活かした「沖縄式エステ」を作れば、観光客も沖縄のエステ・スパを利用することが定番の行動になり、ビジネスとしての展開が広がるのではないかと思います。

また、情報関連についてもいろいろな可能性があると思います。地震が少ない地域である沖縄は、データのバックアップセンターとしての適性があり、具体的に今年の3月に経済産業省のバックアップセンターが県内にできました。今年はソフトウェアオフショアセンター整備とデータセンター整備の2つをモデルにし、大きな事業を行っていると思います。

今までは、沖縄の中では、情報関連というソフトウェアなどが多かったのですが、ソフトウェアの開発をしていくことによって付加価値が上がり、収入が上がるにつながると思います。

ソフトウェアオフショアセンター整備モデル事業に関しては、県内では下請け孫請けのような形で事業をしているところが多いのですが、そうではなく、中小企業が多まかないきれない大型の発注でも分散処理できるプログラムを作り、中小企業でも主体的に事業を行えるようにするものです。そうすると沖縄の企業がまとまって大きな事業を受けることができる可能性が高まるのではないのでしょうか。

「沖縄に赴任されてから、客観的に見て、沖縄のこつというところは改善するべきだと感じられたところはありますか。」

沖縄には非常にいいものがありますが、皆さん気づいてないものもたくさんあるように思いますので、それをぜひ見つけ出していただいて、それでビジネスをすすもうことが一番重要なのではないかと思っています。積極的に見つけるという行為が皆さんにあればもっとよくなると思います。

また、失業率が全国で一番高いという現実ではありますが、そうした中で、公務員志向が非常に強い、というのは数字を見ても感じます。しかし、今の社会のなかで、実際にビジネスをしている人は、いわばプレイヤーなんです。われわれのような公務員は、ルールを作り、それを施行するレフリーのような立場ですから、みんながそれを目指してはバランスが崩れてしまう。たくさんプレイヤーがいないと我々の仕事も成立しないわけです。

そういう意味で、ぜひ、自らがビジネスを作るプレイヤーになっていただきたいなということに常に思っています。特に沖縄の場合は、周りに資源もたくさんありますし、若い人も多いですね。友達ネットワークや「ゆいまーる」というような強固なネットワークもあって、助け合いの精神もありますから、それらを活用し、ぜひ、プレイヤーになって最前線に出たいです。それがバックアップするのが我々の仕事ですから。

バックアップのための助成制度などは基本的にいろいろなかたちで出ています。ネットなどでも情報を公開しています。公共機関の窓口もいくつもあるので、どこかひとつにアプローチしていただくと、いろいろの情報がつながって行って、有益な情報も手に入るはずですよ。わからないとか面倒くさいという前に、いろいろな情報を調べ、自分から動く、という熱意を持っていただければ、国や県などのさまざまな制度が活用できると思いますよ。

「ありがとうございました。」

沖縄県産業振興公社・島袋彩子

5段広告 (166×240)

3段広告 (98×240)